

2009年10月22日

札幌市長 上田文雄 様

(社)北海道自然保護協会

会長 佐藤 謙

「藻岩山魅力アップ施設再整備」とくに山頂 エリアの抜本的再検討を求める緊急要望書

当協会では最近、札幌市において「藻岩山魅力アップ構想施設再整備」事業が実施直前の段階にあることを知りました。この構想はすでに数年前から順次に検討が重ねられ、本年3～4月には札幌市民からのパブリックコメント募集も行なわれた由ですが、当協会では残念ながら、それらに対して意思表示する機会を逸してしまいました。

したがって遅きに失していることは承知しておりますが、この施設再整備とくに山頂エリアは、札幌の自然の象徴である藻岩山の自然環境保全にとって致命的といえる欠陥を内包しておりますので、抜本的再検討が絶対に必要であります。

すなわち下記1のとおり、札幌市が学識経験者から意見を求めた『藻岩山魅力アップのために』の報告書では、山頂施設の問題点として、「山頂に施設があることで山の頂の感じがしない」「山頂に展望台があるため、ふもとから見たときに山頂の景観が悪い」と明記されているのに、札幌市ではその重要な指摘を無視したばかりか、「展望」の機能を充足するには必要不可欠といえない「レストラン・売店」などを大規模にとり入れ、そのために現状以上の大型建築物となって、報告書で指摘された問題点の傷口をいっそう拡大させる内容となっているのです。これでは「魅力アップ」と称する「魅力ダウン」事業にほかなりません。

したがって下記2のとおり、「山の頂の感じ」をとり戻すために自然を回復させることを基本とし、「展望」の機能を充足させる以外の、山頂でなければならない必然性がない「レストラン・売店」などは山頂展望台から削除し、それらの施設は他の場所に整備する方向での、抜本的再検討を行うことが絶対に必要であります。

ただしこの問題は、すでに実施設計など事務的手続きの最終段階にあり、工事着工など予定スケジュールも決まっていると側聞しておりますから、常識的に考えて事業担当部局による自発的な抜本的再検討は困難と思われまます。したがって環境問題に対し特段に理解の深い上田文雄市長ご自身が、「環境の21世紀」にふさわしい札幌の街づくりという大局的な視野から、札幌の自然の象徴である藻岩山の保護と利用が適正に行われるよう熟考し、後世に禍根を残さぬように抜本的再検討を実施することを決意し、担当部局に指示する「英断」をいただけますよう、お願い申し上げます。

記

1 藻岩山とくに山頂部施設計画の問題点

(1) 人工物に占領された藻岩山頂は魅力がない

札幌市が誇る「さっぽろ文庫」第12巻は『藻岩・円山』(1980)であるが、その序文で当時の札幌市長・板垣武四氏は次のように述懐している。

「私は藻岩山を間近に眺めながら少年時代を過ごしました。そして今は円山のすそ近くに住んでいます。私はこの二つの山の恩恵を、人一倍たっぷりと享けながら生きてきたといっても過言ではないかもしれません。(中略)やはり私は、この山(藻岩山)に育てられたという思いが深いのでしょうか。それにしても、ロープウェイが完備した後、徒歩で登る人が少なくなったのは、淋しい限りです。」

この述懐は藻岩山を愛する多くの札幌市民の思いと重なるものがあるといえよう。例えば『藻岩・円山』の本文には、「藻岩の登山道を汗を流して登ってきたハイカーにとっては、自然のままの山頂に立つことができず、そこが有料展望台で占領されているのは、非情なことである」(81ページ)と記述されている。

なぜ徒歩で登る人が少なくなったのか。板垣市長に「淋しい限りです」と言わしめた根源は、札幌市が主催した「藻岩山の魅力を考える懇談会」の報告書、『藻岩山魅力アップのために』(2005)の「懇談会で指摘された藻岩山の問題点」の中に明記されている。すなわち問題点の冒頭には「山としての藻岩山」の項目があり、「山頂に施設があることで山の頂の感じがしない」ということが、まず第一に指摘されたのである。

そうしたことを踏まえて21世紀の「藻岩山の魅力アップ」を考えれば、「山の頂の感じがしない」現状から、「いかに自然らしい山頂をとり戻すか」が、第一の検討課題となるはずである。すなわち藻岩山では、山頂の人工物を撤去・縮小することこそが求められているのである。

ところが札幌市がいま行なおうとしていることは、山頂部の人工物を現状よりさらに拡大する方向であり、「山の頂の感じがしない」ことを解消し、藻岩山の自然をとり戻すためには何が必要かについて、論議したり検討したりした形跡はまったくない。

藻岩山は山頂からの展望が優れ、札幌の市街地を一望することができることが誇りでもある。ということは、これを裏返せば藻岩山は札幌市街の各地から常に眺められていることを意味する。札幌市内の多くの小学校校歌に「藻岩山を仰ぐ」歌詞が謳いこまれていることは周知の事実である。多くの札幌市民が「藻岩山を仰ぐ」場合に、山頂の人工工作物が現状以上に拡大されれば、山稜のスカイラインが破られる度合いが高まり、風致が阻害されることは必至である。

現に、前記の『藻岩山魅力アップのために』の「問題点」の「展望台施設」には、「山頂に展望台があるため、ふもとから見たときに山頂の景観が悪い」と明記されている。これは現存の展望台に対する評価であるが、その展望台がいつそう大規模化されれば、札幌市の当局者が「藻岩山魅力アップ」と思い込んでいる事業が、多くの札幌市民や市外・道外からの観光客にとっては「藻岩山魅力ダウン」以外のなにものでもないことを肝に銘ずべきである。

(2) 山頂施設の設計思想はエコロジーよりエコノミー優先

藻岩山は大都市に隣接する自然林として世界に誇る存在であり、「藻岩原始林」として1921(大正10)年に、「円山原始林」とともに北海道第一号の天然記念物に指定されたことは、いまさら言うまでもない。

その藻岩山原始林および隣接地の環境が大きく改変されたのは、第一に北斜面スキー場開発であり、第二にロープウェイおよび関連施設の整備である。このうちスキー場は

1946(昭和 21)年に当時のアメリカ進駐軍が日本の法律を無視して強引に開発したものである(現在は自然復元の途上)。一方、ロープウェイは 1958(昭和 33)年、山頂へのリフトは 1960(昭和 35)年、山頂展望台は 1969(昭和 44)年に、いずれも札幌市交通局により整備された。これらが整備された当時の日本社会は高度経済成長時代で、人間が自然を支配するという価値観が優勢だった。とくに山頂展望台は藻岩山の三角点を「尻の下に敷く」もので、人間優位の象徴であり、(1)で前述した「山頂に施設があることで山の頂の感じがしない」「山頂に展望台施設があるため、ふもとから見たときに山頂の景観が悪い」主因となっているものである。

ところで高度経済成長時代の開発優先思想は公害や自然破壊を多発させたため、その反省から、それ以降の時代は環境保全優先時代に転換した。21 世紀の現在は「足元の自然から地球環境まで」エコノミーよりエコロジーを尊重するのが当然の時代となっている。

それにもかかわらず、札幌市がいま藻岩山で行なおうとしていることは、高度経済成長時代の遺物をさらに拡大させようとする、時代錯誤のエコノミー優先である。現に山頂展望台施設は「収益的施設」と明示され、その設計も「収益」の観点からより多くの利用者が「レストラン・売店」で飲食を楽しみ、展望スペースは放射状に広がる「張り出し眺望フロンテージを最大限確保」する、まったく人工的なもので自然環境とはなじまない。その他に「札幌の地勢、歴史、文化、自然等の紹介を行なう施設」を併設するという。

多くの観光客が集まる場所に休憩施設や展示施設が必要なことは理解できるが、なぜ藻岩山頂の「レストラン・売店」で飲食を楽しみ、山頂で「札幌の地勢、歴史、文化、自然等」を学ばなければならないのか？ エコロジー優先の考え方に立てば、「レストラン・売店」や「札幌の地勢、歴史、文化、自然等」の展示は、山頂三角点を「尻の下に敷く」山頂の施設でなければならない必然性はまったくない。

『藻岩山魅力アップのために』の報告書(2005)で指摘された「山頂に施設があることで山の頂の感じがしない」「山頂に展望台施設があるため、ふもとから見たときに山頂の景観が悪い」という問題点を改善するためには、まず現状の施設を撤去し「失われた自然の再生」を考えなければならない。藻岩山の観光利用の現状を踏まえて百歩譲ったとしても、山頂は展望に必要な最小限度の施設、すなわち現存の工作物より小規模にとどめ、山頂三角点より高い部分に大型コンクリート工作物を設置し、三角点を「尻の下に敷く」ような開発思想から脱却しなければならない。

「レストラン・売店」や「札幌の地勢、歴史、文化、自然等」を学ぶ施設は、必要があれば、例えば中腹エリアのロープウェイ山頂駅付近に設置することで、十分にその機能を満たすことが可能である。

したがって札幌市が事業に着手しようとする「山頂エリア」の開発は、絶対に容認できない。

2 結論・抜本的見直しの基本的方向

当協会としては「藻岩山魅力アップ構想施設再整備」に関して、山麓エリア、中腹エリアについても、それなりの考え方がある。しかし冒頭に記したように残念ながら当協会としてパブリックコメントの機会を逃し、遅きに失したので、今回は最も重大な問題点を内包する

山頂エリア、とくに山頂展望台に絞って、前記1の理由により、次の方向で抜本的な見直しを行なうことを強く要望する。

(1) 基本は山頂の自然を回復させること

札幌市としては「藻岩山魅力アップ構想施設再整備計画」は、数年間の検討期間を費やし、必要な手順も踏み、札幌市長の決済も終え、市議会への報告・了承も終わっているので、事業に着手することには何の問題もないとの見解であると承知している。

しかし『藻岩山魅力アップのために』(2005)の報告書の冒頭で指摘された「山頂に施設があることで山の頂の感じがしない」あるいは「山頂に展望施設があるため、ふもとから見たときに山頂の景観が悪い」という問題点を、どのようにクリアして「山頂の自然をとり戻すか」という論議や検討はまったく欠落していたと見受けられる。

したがって「人間が自然を支配する」という価値観で整備された高度経済成長時代の遺物である山頂展望台の設計思想を継承・拡大し、「山の頂の感じがしない」現状をいっそう助長する「藻岩山魅力アップ構想施設再整備計画」が、21世紀の「エコノミーよりエコロジーを尊重」する時代に、果たしてふさわしいか否か、抜本的に見直す必要がある。

繰り返すが21世紀の藻岩山に求められていることは、「山頂の自然を回復させること」が基本である。

(2) 展望台施設は最小限にとどめレストラン等は山頂に不要なこと

基本は前記(1)のとおりであるが、一方では藻岩山にロープウェイや山頂付近までの車道が整備され、多くの観光客に利用されているという現実も見逃すことができない。したがって百歩譲って山頂になんらかの施設整備を認めるとしても、それは展望機能を充足する小規模な施設に限定すべきで、それ以外の部分は自然回復を図るべきである。

多くの観光客が集まる地点に、休息施設や案内・説明施設が必要なことは理解できる。しかしそれらの施設は「山頂でなければならない必然性」はまったくない。したがってエコロジーよりエコノミーを優先させる「収益施設」である「レストラン・売店」が、藻岩山三角点より高い部分に、大規模に計画された「藻岩山魅力アップ構想施設再整備」は、とうてい容認できず抜本的に見直しする必要がある。

なお案内・説明施設の代表例とされる国立公園ビジターセンターは、道内各地の国立公園でも整備されているが、それらの立地は利用拠点であり利用最終地点では決してない。

したがって抜本的見直しに際しては、「レストラン・売店」や「札幌の地勢、歴史、文化、自然等」を学ぶ施設を山頂展望台計画から除外し、例えば中腹のロープウェイ山頂駅付近へ移設するような方向でなければならない。

(以上)